

---

# チートでチートな三国志・そして恋姫＋無双。

James・Black

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チートでチートな三国志・そして恋姫十無双。

### 【Nコード】

N0302X

### 【作者名】

James・Black

### 【あらすじ】

聖フランチェスカ学院で部活や勉強に精をだす頑張り屋の主人公、北郷一刀がひよんなことから恋姫の世界に乱入。

知識で知識で戦います。

(2011.10.28(金)に補足)

当作品の「R - 15」指定は、恋愛要素ではなく、グロ・残酷要素が若干ある為です。

そして、今日初めて気がついたのですが、本作を携帯で読むと一部の登場人物の漢字が表示されないようです。

元の雰囲気は壊したくないのでカタカナや当て字はなるべく使用しない方向で行きたいので、携帯でお読みになる際もできれば一度はPCで目を通してからのほうがよろしいかと思えます。

## 前書き

前書き（長くなったので、これだけで1話分使わせてください。）  
初めまして。小説投稿は初めてで、続くかどうか不安ではあるのですが、どうかよろしくお付き合いください。

この小説はB a s e s o n様より発売中の「恋姫♀無双」・「真・恋姫♀無双」及び、「春恋♂乙女」を下地に、適当に混ぜ合わせて三国志の正史と演義の狭間のような世界に主人公が行って活躍するといったストーリーになります。

ゲームはどちらかというと歴史無視、その上で演義重視の展開でしたので、それを改めること・そして、主人公は1800年くらい未来の人間であるためそれなりの知識があることを重視した作品にしたいと思っています。

三国志（外史）の世界にいくまでも話が少しかかると思いますので、ご容赦ください。

とりあえず、キャラ&現世の人物&施設紹介。（原作とは結構違います。）かなり早めに登場するキャラのみ。他は追々。

外史（三国志・恋姫世界のこと。以下外史）キャラはバロメーター（基本的にmax100、以下数値）を書いておきます。

武力（1対1における戦闘力）・統率力（軍を率いて戦う際の力）・知力（軍師力と言っても良いかも。戦場での計略など）・政治力（国政を担う際の力）・人望（魅力とも、この人にならついていきたい。と思わせる力）ですが、あくまで目安として活用ください。

一般兵は順に、30・30・30・30・30・15くらいです。

結構御都合主義です。主要キャラは後書きみたいにして解説入れます。そのとき、正史と演義の違いなど、筆者の思ったことをコメントとして書きます。あと、一部漢字が出ないので当て字にします。ご了承ください。

で書いたところは下に解説いれますので、興味ある方はどうぞ。

なお、外史メンバーの呼び名ですが、もとの三国志世界（後漢末期）では、性・名・字とあり、基本的に名は呼ばず、字も親しい人以外呼ばせないようになっており、性+官職名で呼ぶのが通例だったらしいのですが、めんどくさいかわかりにくいので、この物語では性+名で呼ぶのが普通で、字は飾り。心を許した人には神聖な名である“真名”を許し、それで呼ばせるといふうに統一したいと思います。

現世メンバー

北郷一刀きたごうかすて

主人公。聖フランチェスカ学院2 - 4、文系。剣道部所属。古典・

世界史・日本史・政経が得意科目。剣道ではインターハイに出場するほどの実力を持つ。古武術（酔拳）と剣道が得意。一人称は俺  
数値は、60・35・60・150・50（政治力は現代社会の知識補正ありで150。人望は御遣い補正で+100あるので、実際は150）

及川祐  
おいかわたすく

主人公の友人で同じクラス。適当な関西弁で喋るお調子者。2・4、文系。一人称は、ワイ。

早坂章人  
はやさかあきひと

本来は前作（春恋）の主人公。実妹の羽深うみがいる。

完璧超人のセレブ設定（今後春恋ベースの小説書くなら使いたい設定）の超人1号。

面倒で疲れるからと部活には参加していない。

2・2、文系。一人称は私

藤田祥一  
ふじたしんいち

2・1、文系。なんでも早坂とトップを争う超人2号。

早坂と同じく、面倒かつ疲れる・ライバルが早坂しかいないため、部活は未加入。一人称は俺

不動如月ふゆめい ぎよつき

3 - 2、文系。剣道部主将。

剣道の腕前は天才レベルで、中学以来、公式戦無敗を誇る。

この作品での剣道の団体戦は先鋒・次鋒・中堅・副将・大将の5人で勝ち抜き設定なので、一人で5人倒しても団体優勝となる為、個人も団体も優勝を総ナメしている。

北郷より剣道は強い。なぜか武士のような言葉遣いで喋る。

化学工業系の大企業“不動グループ”会長の孫娘。一人称はそれがし

聖フランチェスカ学院せい かくいん

今時珍しいカトリック系の高校。昨年までは女子のみの学校だったが、少子化の煽りで今年から共学化し、男子も受け入れる（1クラス20人に多くて3〜4人程度）ことになる。

1組から8組まで8クラスあり、1〜4組は文系・5〜8組は理系

となっている。

いわゆる“お嬢様学校”だったため、基本的に上流階級の子女ばかりいた。

敷地内に幼稚舎・中等部・高等部・短大部がある。上の5人は全員高等部。学生・卒業生から大量の寄付が集まるため、施設はかなり豪華。

(原作はたぶん東京のどこかの私立女子大をイメージしたと思われる)

今作は諸事情から立地は愛知県某市。基本的に男子も女子も寮で過ごす、申し出があるなどの場合、アパート・マンション・下宿などからの通学も可。但し、一人暮らしが前提となる。

学食の名は黎明館<sup>れいめいかん</sup>。

外史(三国志・恋姫世界)

女?<sup>じよか</sup> 真名はなし。

中国における絶対者(神)の一人。封神演義(藤崎竜氏によるジャンプの漫画が有名か?)などに登場。藤崎作品では完全なる悪役でミュータントみたいな姿であったが……。

今作では、(株)KOEI様より発売中「無双OROCHI 魔王再臨」の女?をイメージしていただけると助かります。



戦闘力の低い主人公を守り、かつ、外史で企む悪の仙人を封印するため、主人公に同行。

“女？”の名は迂闊に喋るとエライことになるので、普通は、甄姚しんようと名乗り、そう呼ばせることに（本当は甄姫しんき・曹丕の第一夫人、魏三代皇帝、曹叡の実母）の蒼天航路版の名ですが、もともと女性だった方は例外（貂蝉）除き殆ど出ないため、貂蝉の次に美しいとされる甄姫の名を採用）しました。

冷静沈着な性格のアイロニスト・・・のはずがけっこう面白い性格しています。

流麗な銀髪（なぜか先は黄緑）と頭の上の金の輪・そして臍のピアスのような飾りが特徴的。

武器は細剣。

数値は全部500くらいか？中国創世神話、三皇の一角を占める神のため、基本的に無敵。一人称は私

劉備りゅうび 玄德げんとく 真名は桃香とうか

見た目は普通の女の子だが、前漢6代、景帝の子孫で、治安が悪化して惨憺たる現状の後漢を見過ごせず、関羽・張飛らと義勇軍を結成し、漢の復興をめざす。

理想主義者で、情にもろい。

“自分一人では何もできない”ことを自覚しているのが最大の利点か。劉邦にも似たところあるね……。一人称は私

(コメント)

演義では聖人君子だが、実際は寄生した主は曹操以外全員滅亡している(陶謙・劉表etc...)。どちらかというと正史ではヤクザの親玉のような描かれ方で、演義とは対照的。

数値は、55・50・50・60・100

武器は雌雄一对の剣(二本の刀)

関羽かんう 雲長うんちやう 真名は愛紗あいしゃ

絶大な武力・部隊を指揮する統率力・そして敵の計略を看破する知力に優れる、正に知勇兼備の猛将。

没後、世界で神となったある種三国志最大の英雄か。一人称は私

武器は青龍偃月刀。せいりゆうえんげつとう

数値は、100・100・80・60・75

(コメント)

軍神・関羽。正史では傲慢なところがあり、それで身を滅ぼすも、多くの武將に影響を与える。大陸の呂布・荊州の関羽・合肥(揚州)の張遼と、そこに居るだけで戦場を支配すると称される、まさに怪物。

張飛 ちようひ 翼徳 よくとく 真名は鈴々(りんりん)

正史では益徳えきとくだが、翼徳のほうが私も読者も慣れているだろうと判断し、こちらに。

。武力は関羽以上かもしれないが、いかんせん猪だったりする……

愛くるしく、憎めないキャラ。一人称は私

武器は破軍蛇矛はへんたまたまづ

(コメント)

やはり正史では傲慢な性格。酒に溺れ、酒に負け……。大喝で曹操軍の追撃をつぶした話はあまりに有名。

数値は、101・95・40・20・60

左慈 さじ  
元放 げんほう

敵キャラ。仙人。藍色の髪の策士。

三国志では詳細不明の扱い。何者？

数値不明。

于吉 うきき

敵キャラ。仙人。銀髪の男。敵を見下す癖がある。

三国志演義では、孫策を呪い殺す？役割を果たすも、詳細は不明。

数値不明。

とりあえず、今はこのキャラで少し進みます。そのうちたくさん三国志の武将たちを登場させる予定ですので、のんびりお待ちください。

開始は夏休みの前日（7月中旬）をイメージ。インターハイは7月末〜8月1週目に設定。

ずいぶん長い前書きになってしまいました。次回より、本編開始です。基本的に主人公のモノローグですので、ご理解ください。

#### 追記

主人公が（ほんごう）ではなく（きたごう）にしていること、左慈と于吉が原作（恋姫）と逆なのは意図的なものです。読者様から指摘ありまして、ちゃんと書いたほうが良いかと思いましたが。

## 前書き(後書き)

あえてWikipediaをイメージしてみました。

第1話 邂逅（前書き）

ようやく本編。

お疲れ様です。読者様。

## 第1話 邂逅

冷房の適度に効いた教室で、担任が夏休み前最後の連絡事項を話している。

「今日で一学期は終了です。期末テストの皆さんの成績も上々でした。聖フランチェスカの学生として、節度ある夏休みを楽しみましょう。また、我がクラスの北郷君が剣道個人で全国大会出場を決めています。健闘を祈りましょう。では、また9月1日に会いましょう。」

そして、日直の礼とともに一学期は終了。

「北郷さん、インターハイ頑張ってくださいね！」

周りの女生徒から応援の言葉をかけられる。ありがとと応じる。やっぱり女の子の声援は力になるなあ……。あとは山盛りの課題と剣道か……。頑張らなきゃな。

「おーおー。かずぴー大人気やなあ。一緒にメシ行かんか？」

「ああ、いいぜ。でも、その後剣道部いつて練習あるから、それまでな。」

友人で同じクラスの及川から声をかけられた。

剣道部は男子部員が少ないので、団体での出場はかなわなかったも



の、俺は個人戦では県2位でインターハイ出場を決められた。全国  
の猛者と戦うのだから、万全の練習をしなければいけない。もう、  
残り2週間ほどこしかないのだから。

「北郷〜。」

とりあえず黎明館で食事でもしようかと思っていると、間の抜けた  
呼び声が聞こえた。

「早坂さんに藤田さんすか。何の用すか？」

「ん？ああ、部活で課題をこなすのも大変だろうかと思ってね。一  
番面倒そうなのだけ先に片付けようかと思って誘ったのさ。」

「そうそう、ウチの学校の無駄なハコモノNo.1、東洋史史学資  
料館、通称”B級コレクションの館”にある資料を一つ選択し、レ  
ポートと考察を書けてやつ。2年の伝統課題だつてさ。アホくさ。」

「という早坂さんと藤田さん。そういうえばそんな課題もあつたなあ・  
・と思ひ出す。」

「せやかて、コイツは今からワイと食事なんやで。早くメシ食わん

と練習が短くなってまうやん。」

「購買で買って歩きながら食べて資料見て携帯で写真でも撮ればすむじゃないか。緑のカーテンの中で食べるのもなかなかオツなものだよ。今12時半。練習は1時半か2時くらいからじゃなかった？」

「そうですね。練習は遅くとも2時には参加したいっすね。最低4時間はやりたいですし。」

「じゃ、問題ないね。行く？行かない？」

「折角の誘いですし、ありがたくのらせて貰いますよ。」

何せ、学期始めの学力診断テスト・一学期中間・そして期末でも全教科あっさり満点をとる天才二人なのだ。宿題の手助けになるならありがたい。

そして、購買でサンドイッチとカフェオレを購入。

「しかし、ここのは何から何までウマイわ。スタバとかドトールよりうまいんとちゃうか？」

「そうだな。食べ物美味しいのは一番ありがたいぜ。」

「お前らも買ったか？じゃ行くかうか？」

ぐだーつとやる気ない話し方と引き締まった合理的な話し方が合わさってる……。早坂さんは二重人格なんじゃないか？と思うことがある。

「お、不動先輩。先輩も購買つすか？」

「藤田殿。おや、早坂殿に北郷殿、及川殿も一緒であつたか。北郷殿は今日は部活は来るのかの？」

周りの女生徒が「如耶姉様！！」と黄色い声をあげるなか、本人はいたって平然としている。この度胸もすごいよなあ……。

「はい、これから資料館にいつて課題の下準備したら部活行く予定です。1時半から2時くらいですかね。あそこからだと剣道場わりと近いですし。」

「うむ。あの課題は大変なのでな。頑張るのじゃぞ。それがしも食事をして少し休息したら部活へ行く予定でござる。また会おう。」

「相変わらず美人や〜。最高や〜。不動先輩。玉の輿玉の輿。」

及川が一時トリップしてしまつたが、とりあえず資料館へ。木々が真夏の日光を遮っているため、日射しはそれほどでもない。それでも暑いことは暑いが……。

ちょうど食べ終わったころ、資料館へ到着。

「ここかあ。春に興味本位でちょっと覗きにきたけど、中途半端なのしかなかったよなあ……。覚えてるか？藤田。」

「ん、なんだか偽物の確率100%みたいなのしかなかったような……。確か理事長で慶大の名誉教授の肝いりで作ったんだろ？ここにしても胡散臭いわ。ガラクタ収集で有名ならしいし。」

「あー。そついやそんな話だったね。何でウチに短大部まであんに理事長は慶大なのやら。名大にすりゃいいのに。」

そついう問題なんだろうか……。と思いつつ、資料を見る。が、何だか向こうで資料を見る男が気になる。なんかブツブツ呟いてるし。キ〇ガイか？

「何コレ？確かに超古いのは間違いないけど、なんでメンマを漬けた壺なわけ？ふつうもつとマシなの漬けるでしょ。しかも後漢末期とか三国志の時代じゃん。メンマあったの？」

「さあ？こつちは箸かな？ん？誰だアイツ。あんな奴ウチの学校にいたっけ？」

「あ、藤田さんも気になりました？なんかたたずまいがタダ者じゃなさそうだし、何か呟いてるし、さっきから気になってたんすけど。」

「

「そんなんどうでもええやん。さっさと資料みてこんなアホらしい課題おわすんがええんやないの？」

「早坂はどう思う？ けっこうやり手みたいだけど」

「ん……。なぜこんなところにコレがある。ようやく見つけた。外史への突端。道標。変な奴だな。まあ、確かに体術はなかなかやるみたいだな。私や藤田と同等かねえ？」

「な、なんでわかるんや？ てか、ありえへんでお前ら！ なんて見ただけで強いかわかるんや？」

「んなのふつつじゃねえか？ しかし早坂、読唇術とは流石だな。」

「まあ、俺は鍛えてるから。この二人もそうでしょ。にしても早坂さん、今の本当っすか？」

「多分……。まあ、どーでもいいんじゃない？ それより、私はこの紙をレポートのネタにしようかな。蔡倫が作って、いつからか竹にとってかわったらしいし。その辺かけばいいんだろっし。」

「じゃあ、俺はこの偃月刀にしようかな。後漢末期の技術で偃月刀なんてなかったらしいし。武器の変遷みたいなの。」

さすが……。としかいいようがない二人だ。膨大な知識であっさり内容を決めてしまった。

「俺は鏡にしようかな……。卑弥呼にプレゼントしたとかいう、

神秘性のカタマリ。」

「なんでそんなにあっさり決まるねん！！もーええわ。ワイはこの壺や。メンマや、保存食や」

と、一応4人とも決まる。あとは部活行くだけ。まだ1時20分。これから剣道場まで10分くらい。余裕だ。

「どーね。ちょっとイタズラしてこようかな」

「ん？何すんの早坂」

いきなり早坂さんが例の男子生徒のほうに向かっていく。

「ごめんごめん、私にもそれ見せてくれない？」

「ん？何だキサマは？」

「うわ。あの早坂をきさま呼ばわり。度胸あるねえ。」

という藤田さん。確かに……。遠巻きに見守る。

「いや、キミも課題でレポート書きにここに来たんでしょ？私もそ

れ見ようかなあ……と。一通り見ておきたいし。」

「あ、ああ。スマン。」

足早に去る謎の男。てか、早坂さんの威圧感がパネエ。口調はふうなの……。

「これも鏡だねえ。三角縁神獣鏡とも八咫鏡とも伝わる……いやいや、こんなところに国宝あるわけないじゃん。てか、三種の神器をなんだと思ってるの?」

俺たちもその鏡を見に行く。

「確かにただの鏡っすね。とりあえず、写真とってあとは部活行きますわ。」

この資料館は撮影可能なのがありがたい。携帯で説明と展示物の写真を撮って、さて部活へ。

みっちり5時間強汗を流し、今は7時。

「北郷殿、この後はどうするのじゃ? 夏期休暇中も申請すれば寮の生活も可能じゃが。部活は8:30~19:30迄となっておりますが。」

と不動先輩が聞いてくる。今日は自由練習だが、全員が参加した。

とはいえ、だいたい準備があるので5時には帰ってしまい、俺と先輩の二人しかいなくなってしまったが。おかげで稽古をつけてもらえた。役得役得。

「インハイまでは寮の申請出してるんで、それまでは学校残るっす。先輩はどうするんすか？」

「それがしは明後日からは家から通う予定じゃ。親父殿が帰れとうるさいのでう。」

「そうっすか。お疲れさんでした。あと着替えて寮戻ります。」

「鞆もあってたいへんじゃな。ではまた明日会おうぞ。」

というわけで、剣道場を後にする。鞆・胴着と荷物は結構重い。寮はさっきの資料館のほうに向かえば15分ほどだ。

「そっついや、今日は変なヤツがいたんだなあ……。ウチの学校染色禁止なのに茶髪だったし。アイツ誰だったんだろう？」

と思いつつ資料館のあたりまで行くと、昼間の男が居た。走っていた。手に鏡を持って。

「ちっ。今日はツイてるのかさっぱりわからん日だ。ようやく鏡を



見つけたと思ったら怪物みたいなのがいるし、盗んだら今度は見つかるし……。」

何なんだこのマヌケは……。自分で盗んだとか暴露してるし。怪物って早坂さんかなあ……。？とりあえず、捕まえて警察呼ぶか。

「とりあえず、盗んだその鏡を返せ！」

「うるさい！！邪魔するなら潰すまでだ。」

うおっ。いきなり蹴りかよ。しかし、こっとうときは守るモノがあるほうが不利。そして、とりあえず胴着をぶん投げる。あんまりやりたくないが……。

と……。ヤツに当たって鏡が落ち、割れた。それと同時に鏡から光があふれ出し、俺たちを包み込む。

「な、何だ？！何が起きてるんだ？」

「クソッ。まあいい、貴様は外史の突端を開いた。もう引き返せない。せいぜい足掻け。そして覚えておけ、所詮、外史は人形の世界だ。」

「な、何言ってるかさっぱりわかんねえよ。てか、まずテメエは何者だ？」

「オレは于吉。じゃあな、クソ餓鬼。」

捨て台詞を吐いて消える銀髪の男。于吉って三国志のヤツじゃねえか？意外とあっさり答えてくれたな。てか、俺はどうなるんだ？

体と鞆が光に包まれ、俺は意識を失った。

## 第1話 邂逅（後書き）

とりあえず、導入部分その一。次回で導入部は終了です。

## 第2話 定め(前書き)

今回は前回より短めです。

## 第2話 定め

「これ以上の不確定要素などいらぬ！！外史は外史。我らが手を下す領域にはない！！あのクズ共を隠密に潰さねば！！」

「じゃが、まずは此奴じゃろう。20世紀末の日ノ本、日本からの来訪者を何とかせねば。伏犠、お主はどうすべきと思う？」

「ふうむ。元始の言うことも尤もじゃが、すでに来てしまった身。生かすか殺すか。いずれにせよ、そのまま戻すわけにはゆかぬ。」

「面白いことになってきたわん。誰かと一緒に外史を統一させる旅に出すっていうのはどうかしらん？勿論、嫌なら死んで元通りよん。」

「姐己！キサマやる気があるのか？！ 仙人を何と心得る？！」

「聞仲ちゃん、怖いわん。」

「意外と姐己のやり方が良いのかもしれない……が、まずは本人に聞かねばな。」

「zzz・・・」

「さすが女？様。話がわかるわん。」

うーん……ここどこだ？俺は何でこんなところにいるんだ？

確か、于吉とかいうヤツと戦って、鏡が割れて……うわ、上に人がいるぞ。なんか裁判所とか闘技場みたいだ……。俺どうなるんだ？

「おーい。誰か居たら俺はどうなってるのかおしえてくれー。」

「キサマは于吉というカス仙人に巻き込まれ、開闢の鏡によって外史に巻き込まれるところだったのを俺が助け、ここに連れてきた。」

「ここってどこなんだよ？てか、外史って何？」

「ここは仙界。人ならざる神と仙人の地。外史とは、空想の産物。連中が作ったのは、女ばかりの三国志世界。英雄が皆女になった世界だ。貴様は鏡によって外史へ行かざるを得なくなった。」

「はあ……？わかるようなわからないような。俺剣道練習してインターハイに出ないといけないんだけど。」

「元の世界に戻ることはできないのかー？てか、そこからじゃ顔が見えないから降りてこーい。」

「我らに向かつて何と無礼な……。元の世界へ戻る方法は2つ。死ぬかこの外史で起こった争乱を終結させ、中国大陸を一つにする

かだ。」

「お、俺に奇っ怪な三国志の世界に行けっただのか？ 戻ったときの時間はどうなるんだ？」

「嫌なら死ね。一撃だ。苦しみもない。外史は外史にすぎぬ。そこに住む者にとっては自分の世界でも、貴様には夢の世界。逆もまた然りだがな。つまり、時間は進まぬ。経験と記憶だけが残る。」

「へえ……。本当なら早坂や藤田、不動先輩に近づくことができるかもな。ボディガードみたいなのを付けてくれるなら行くぜ。」

「贅沢な奴だ。我らの中から選べ。直観でな」

そう言うと、仙人？たちは俺の近くへスーッと降りてきた。

額に玉を嵌めたジジイ・カプセル式揺りかご？に入った若い男・鞭を持った片目に飾りのある見るからに強そうな男・水着みたいなのを着た女・黒と白の混ざったような、つかみどころのない男、大剣を持っている・そして、銀髪に金の輪、臍に金の装飾、大極図をあしらった衣装を着た女。

の6人だ。誰か一人か……。一番タイプで大極図のかつこいいこの女にしよう。

「一番右の女の仙人がいい」

そう俺がいうと、水着の女が一言。

「女？様を選ぶなんて、あなたもやるわん。」

「フム。決まりじゃな。女？、お主はこの男と助けるときと外史に紛れた仙人を捕獲・殺害するとき以外その力は一切用いてはならぬぞ。」

そう男が言い、俺は啞然とする。

「女、女？・・・？ 中国創世神話の、三皇の一角・・・。」

「おや、知っておったか。その私だよ。お前は”天の御遣い”としてこれから外史に降りる。そこで天下を統一し、晴れて自分の地に戻る。最初、どこに降りるかだけは決められるぞ。他は追々話してやるぞ。」

マジかよ・・・。まだこの出来事に頭がついていかない。まあ、夢って言われてるけどさ。夢でも寝て、起きて、奇妙な三国志の世界で俺が天下統一かあ・・・。

とりあえず、俺が行く場所は決まってる。

「じゃあ、幽州？郡にしてくれ。」

「ほう、そこに思い入れがあるのか？」

「ああ、どうせ行くなら、俺の思う三国志の最高の軍人が5人、政



治家、軍師はそれぞれ2人居る。全員仲間にはできないだろうけど、その中でも関羽は確実に劉備のところに行く。だから、そこに行く。

「残りの8人が気になるが、まあ、良かろう。」

ククツツと笑いながら、俺の体が浮く。女？と共に移動してるみたいだ。

これから、俺は不思議な三国志の世界に行く。元の時間軸で元の世界に戻れると聞いたら、もうこの世界を楽しむしかないような気がする。

そして、俺は女？から色々なことを聞く。これから行くのはだいたい185年くらいの古代中国。前年に黄巾賊が乱を起こしたらしいが、俺の知る三国志とは時代がムチャクチャ違うらしい。行けばわかると言われたが……。

于吉・左慈といった悪の仙人が敵として居ることなど。そして、女？本人は俺を守ることとそいつらを捕まえる以外には力を使えないらしい。なんでも、外史そのものをねじ曲げるほどの力になりかねないかららしい。

そして、自分のことは甄姚と呼び、通称”甄”とした。

そして、広大な地に着いた。



## 第2話 定め（後書き）

なぜなら、キリがいいのがここだから。次回からちゃんど？三国志（恋姫）世界に入ります。

元ネタは封神演義とか。わかる方はいらっしやるかな？

### 第3話 出会い(前書き)

ようやく本編開始。けっこうグロ描写あります。苦手な方はお戻り  
ください。

### 第3話 出会い

「桃香さま、いくら何でも危険です。管輅の占いの他にも色々な占い師が

” 乱世治める者現る。この世にはあらぬ白衣の男と金輪の聖女の二人組である。称して、天の御遣い”

と占っていたとは言え、その真偽も確かめず、管輅の占いの

” 幽州？郡に現る”

を信用してこんなところまで来るなんて。」

「いいじゃない愛紗ちゃん。この乱世を何とかするには、悔しいけど私たちだけじゃどうにもならないんだから。」

「……ん？何か天から光が落ちてくるのだ。」

「な……。とりあえず、あの岩陰に隠れて様子を見ましょう。」

「ここが、幽州？郡……。劉備の生まれた地か……。」

「やはり感慨深いものがあるか？」

広大な大地。日本とは別世界だ。見渡す限り平地。緑の地がずっと広がる。俺は今、女？と共に移動中。光の膜のようなものに乗る、いや、乗るといふ表現をおかしいか、で移動して、ちょうど今地上に着いた。(1)

空気がおいしいっていうのはこういうことか。そして、空の碧さもすごい。今の日本とは比にならない美しさだ。いい世界……。

「ああ、にしても、美しい世界だな。とりあえず町に向かうか。案内してくれ。」

「私はお前のナビゲーターではないのだがな……。まあ、良からう。向こうに村がある。」(2)

あっさり案内人に。ありがたい仙人だ……。

少し歩くと、大きな岩が見えた。日が昇っていて暑い……。

カバンもそのまま持ってきたし、結構重い。

中身は英語・政経・古典・世界史の教科書とノート、資料集とかか。筆記用具に携帯、電卓と時計もあるな。電卓と時計はソーラーだから水にさえ気をつけられずとつかえるな……。時刻合わせられるかわからないけど。

「とりあえずあそこで休もう。ん、お前は全然汗とかかいてないな。何でなんだ？」

「仙人は食事もするし、水なども飲むが、排泄は一切ない。汗もその中に入る。無駄な物はすべて崑崙山のエネルギーとして吸われる仕組みだ。」

「へ〜。仙人って便利だなあ……。」

「すごいな仙人。羨ましいぞオイ。ん？前方から三人の男が走ってきた。」

「ウツヒヨ〜。今日はツイてるぜアニキ。上玉の女に高そうな服着た男。いい金になりそうでっせ。」

「全くだぜチビ。おい、やっちまえデク！」

「恨みはないけど、これも乱世。しかたないんだな。」

豚みたいな男が剣を持って襲いかかってきた。野盗の類か？しかし、他の2人はガリガリだなあ。俺が178cmの75kgだが、豚は俺より少し大きいくらい。体重は100kgいつてるのかな？どうやらデクと呼ばれてるらしい。

リーダー格のヤツはアニキと呼ばれてたヤツか？俺より小さいやせてる。チビ？に至っては小学生並だ……。ちなみに、女？は180cmくらいか？体重は不明だ。

「ここは私がやるのか。とりあえずこの豚を片付ける。」

そう言って女？は俺とデクの間割り込む。剣を振りかぶり、刹那。

3人の首と胴が分断された。

「おや」

吹き出す大量の血。吐き気がこみあげてきた。最後にメシ食ってから相当時間経ってるから、出るのは胃液だけ。

そして、俺は女？につめよる。

「何でだ……。何で殺した！！殺す必要なんてなかったはずなのに……！」



「仕方なかるう。人間界に降りるなどかなり久しぶりなので、加減を誤ったのだ。だが、お前はこれから大量の”死”と向き合う。かわいそうだから殺さないでは敵が増えるだけだぞ。」

にしても……。何か他に方法はなかったのだろうか……。と思わずにはいられない。ようやく吐き気は収まった。でも、あの光景は今も焼き付いている。

「とりあえず、金や武器、その他使えそうな物をいただいて、埋葬しよう。ここは目立つ。」

「意外と現実主義者なのだ。にしてもこ奴らに埋葬する価値があるとは思えぬが、まあ良かるう。」

服から何から全て脱がせ、女が一瞬で土を切り取り、それを仙術で浮かせ、その穴の中に三人の首と胴をそれぞれ入れる。そして、土を仙術で戻す。

「どうか、安らかに……………」

そう言い、手を合わせる。

そして、服（遺留品とでも言うのだろうか）を探す、小汚い服とデクと言われていたヤツが使っていた剣。そして……コインが見つかった。

「コレは、まさか”五銖錢”か!？」（ 3 ）

世界史の授業でこの間習ったばかりのモノが出てきて俺は感動する。

「さっきまでゲーゲーやってたわりには立ち直りも早いし、感動する余裕もあるとは、人とは面白いものだな。」

「う、うるさい！ 頼むから思い出させないでくれ……。」

どうやら、このコインと剣以外はめばしいものは無いな。野盗になりたくてなったわけじゃないのかもしれないのに、すまないな。

「さて、村に行こうか。まずはご飯を食べよう。”腹が減っては戦はできぬ”とはよく言いつし。」

「ではそうするか。ん？その岩陰に隠れている3人、隠れていないで出てこい……!」

そういえばそんな心配がする。野盗の一件のショックが尾を引いてかंगाえられなかったが。

「ご、ごめんなさい。別に隠れてたわけじゃないんです。私たち、”天の御遣い”という二人組をさがしていて、この近くに居るっていうから愛紗ちゃんたちと探していたんです。」

「貴様！！本当に天の御遣いなのか！？人を殺して挙げ句盗みまではたらくなど言語道断！！恥を知れ！！」

なんだか女の子が3人出てきましたよ。サイドテールの黒髪の美女がめっちゃ怒ってらっしゃいます。名前は愛紗ちゃんっていうのかな？

「やれやれ……。面倒だな。まあ、ここはお前に任せるよ。命が狙われたら助けてやるさ。それまで見物させてもらうよ。」

そうクスクス笑いながら女？はもう何もする気はないらしい。俺一人で切り抜けるってか……？

「えーっと、愛紗さんでいいのかな？」

「金がなければ何もできないんだよ……。」と続けようとした

とき、彼女がいきなり殺気と共に刀を向けてきた。女？があっさり止めたが……。

「と、取り消してください!!」

「取り消すのだ!!」

桃髪の少女と小さい赤髪の女の子が慌てたように叫ぶ。は？俺なにか問題発言しました？

「貴様！その上いきなり真名を呼ぶとは何のつもりだ！？殺された」といふことでよいのだな!？」

真名？真名って確か漢字のことじゃなかったかなー。(4)

なにか問題発言だったらしいが、何のことやら。

「甄、なんのことだかわかるか？」

「さあ？さっぱりだ。」

といて肩をすくめる女？。頼りにならねえ仙人……。まあ、コイツ居なかったらさっき愛紗さん？に殺されてただらうけど。

「えーっと、真名って何？ 俺、何か悪いこと言った？」

「え……？今愛紗ちゃんのことを”愛紗”って言ったじゃないですか。」

「うん。何か問題あるの？名前でしょ？」

「ち、違います！真名っていうのは、親しき人、心を許した人にしか呼ぶことは許されない、神聖な名なんです。愛紗っていうのは彼女の真名なんです。」 ( 5 )

は——？俺そんなの聞いて無いんですけど。それに、赤の他人のまえでそんな大事な名前呼びます？ふっつう。

「お、おい甄、なんで言わなかったんだよ？」

「私がいちいち外史の細かいところまで知っているはずがないだろう。万能な辞書じゃないんだぞ。」

どうやら、俺が悪かったらしいな……。謝ってなんとか場を収めるか。

「すまない。真名というものの存在をそもそも知らなかったんだ。その桃髪の女の子がキミのことをそう呼んだからってつきり名前だ

「思ったんだ。悪かった。」

「な……。しかし、貴様の目を見る限り、嘘は言っていないよ  
うだな。だが、なぜ殺し、その上略奪まで働いた？」

「ああ、その話か。殺すのは予定外だったんだ。どうも、彼女が加  
減を間違ったようだね。金がなけりゃ何もできないんだ。ご飯を食  
べることから何から。だから奪った。どうせ、俺が奪わなくても誰  
かが奪う。それに、俺は今無一文だしね。」

「だからといって……。」

「もういいよ。愛紗ちゃん。ところで、大陸中で広まってる占いの

”天の御遣い”

っていうのはお兄さんたち2人のことなのかな？」

そう、桃髪の少女が尋ねる。

「どつちやらそつらしい。しかし、どつちいふつに占いで広まってい  
るのか教えてくれないかな？」

「えーっと、

” 乱世治める者現る。この世にはあらぬ白衣の男と金輪の聖女の二人組である。称して、天の御遣い”

というのが大陸中の殆どの占い師のお告げ。その中でも管輅ちゃんは

” 幽州？郡に現る”

とまで占っていたんです。。。」

ずいぶん仰々しい占いだなあ、と関心。まあ、ポリエステルの服なんてこの世界には無いし、ましてや頭にわか付いてるしねえ、女？さんは。

「なるほど。ありがとう。俺は北郷一刀。彼女は甄姚。仙人で俺の警護人だよ。良ければキミ達の名前を教えてくださいかな。あと、そんなに大事な名前はできれば赤の他人の前では言っただけでほしくないなあ。。。」

「そ、そうですね。ごめんなさい。私は劉備。字は玄德です。」

は？

「桃花さま……。まったく……。私は関羽。字は雲長だ。」

は？

「姉者たちがするなら仕方ないのだ……。鈴々は張飛。字は翼徳なのだ。」

は？

軽く卒倒しそうなんですが。どっちかっていうと可憐な部類に入る女の子が劉備に関羽、張飛ですと!?

「えーっと、ホントにキミが劉備さんで、黒髪の子が関羽さん、赤髪の子が張飛さんでいいの?」

「そうですよ?それがどうかしましたか?」

軽くシヨックなんです。カルチャーシヨックとかそういうやつですか?ありえねえ……。まあ、驚いてばかりじゃ進まないしな……。

「いや……。何でもない。で、俺たちがその”天の御遣い”ならどうするの?」



「今、この世は乱れ、匪賊や野盗が跋扈しています。私はそれを見  
過ごせない。中山靖王、劉勝の末裔として、何としてもこの後漢を  
再興させたいんです。そのために、”天の御使い”の力を借りたい。  
」(6)

来たよ理想家。早坂さんの一番嫌いなタイプだよなあ……。俺も  
好きなタイプじゃないけど。現実を見なきゃダメだよ。

「なるほどね……。言いたいことはわかるよ。でも、まず俺から  
一つ質問していい？ 孟子の”易姓革命”ってわかる？」(7)

「え……。その、なんとなくはわかります。」

「後漢はもう終わりだよ。そもそも、豪族によって奉られた国家だ。  
それが、だんだん豪族の力が強大化している。もう後漢が潰れるの  
は決まりだ。キミの先祖のような政策をする力も、そんな偉大な政  
治家ももう残っていないしね。」

「そんな……。え？私の先祖ですか？」

「そう。前漢6代皇帝、景帝。豪族の力を削り、結果的に乱を招い  
たが、それに勝ち、豪族の力を減らしたから次代の武帝がすばらし  
い政策をどんどん行えたんだ。」(8)

でも、そんな力は後漢にはない。ならば、俺たちでやるしかない。義と法。一見相反する儒家と法家の思想を取り入れ、合わせてこの国を統一するんだ。キミを中心に、”天の御使い”が協力しているという大義を持ってね。

後漢はほっておいても滅亡する。助けるなんてそもそも無理な話さ。それなら俺たちが国をつくって、そこで漢の理想を実現すれば、それでいいじゃないか。

ただ、10人今見殺しにすればあとで1000人が助けられるなら10人を見殺しにするようなことができる覚悟はいると思うよ。」

そう、これが早坂さんの思想であり、理念。統べるものの覚悟だ。正直、俺にどれだけできるかはわからないけど、やるしかない。

悩む劉備さん。まあ、それが普通だよねえ。

「わかりました。でも、私はできるなら救えるものは全て救いたいたいと思います。私の真名、桃香を北郷さん、いえ、ご主人様に預けます。どうかいっしょに天下を統一して平和な国をつくりましょう。」

「

「桃香さま……私の真名は愛紗。これから真名を預けさせてもらいます。」

「むー。張飛の真名は鈴々なのだ。よろしくなのだ。お兄ちゃんにお姉ちゃん。」

「お、お姉ちゃんだと……。」

決断早いなあ。しかし、ご主人様はやめてほしいな……。そして女？が目を白黒させている。さすがに戸惑っているな。"お姉ちゃん"には。

「俺たちの旗印、というかやり方は"法の下の平等"。"天下布武"。"風林火山"にしよう。」

( 9 . 1 0 . 1 1 )

法というものを決め、違反した者だ誰でも裁かれるのが"法の下の平等"。

天下を武力で統一するのが、"天下布武"。

"風林火山"はわかるよね？

ただ、今は"風林火山"以外は使うと他の勢力から目をつけられる

からダメだけど。」

「素晴らしいと思います。でも、今使えないのはどうしてですか？  
感嘆しているような桃香さん。」

「まだ後漢という国が存在している以上、”名目上は”後漢に従わ  
なきゃいけない。従わないと逆賊になってしまう。そうになったら、  
全ての豪族が敵に回って俺たちは終わりだ。」

「なるほど……。ここから少し歩くと村に出ます。その桃園  
で結盟しませんか？そこから、私たちの戦いの始まりです。」  
（12）

「いいね。じゃあ、行こうか。」

## 解説

1 原作では砂漠みたいな感じでしたが、4000年前のアフリ  
カはものすごいジャングルだったそうですし、ここが緑豊かな大地  
でも違和感はないかな……。と思いましたのでこうしました。

2 正確には”村”ではなく”邑”であったのかもしれませんが、

どうもわかりにくい（筆者もわからんです。ハイ）ので、村に。

3 五銖銭・・・前漢7代、武帝が鑄造した貨幣。質が良く、偽造されにくかったため、唐の時代までずっと使われた貨幣。

4 真名/仮名 日本の平安時代において、漢字のことを真名と呼び、ひらがな、カタカナのことを仮名と呼んだ。

5 恋姫で特にすばらしいと思ったシステム。関羽「女なら違和感タツプリだが、愛紗という真名を挟むだけであんまり違和感を感じられなくなる（私だけか？）

6 中山靖王、劉勝・・・前漢6代景帝の第八皇子。父の景帝ともども絶倫ファイヤー（笑）だったので、子孫は恐らくうじやうじや居たと思われる。つまり、劉備はそんなに希少種ではない。

（ただし、宦官の息子の曹操や出自不明な孫権よりははるかにマシ）

後漢の初代光武帝（劉秀）も確か景帝の子孫だったはず。

7 諸子百家の一人、孟子の唱えた説。ざっと説明すると、王家の徳が落ちてふさわしくなくなったら”禅譲”か”放伐”により王家が変わるといふもの。

日本の天皇家や欧州の王朝のとにかく血縁を大切にするのは180。違う考え方。だから中国は王朝がコロコロ変わる。

## 8 呉楚七国の乱のこと。

9 法の下での平等・・・アメリカ独立戦争やフランス革命でのスローガン。法を破れば王だろうが農民だろうが等しく裁かれるというもの。

10 天下布武・・・戦国時代の英雄（人心掌握術は下手だったようだが）、織田信長のスローガン。武をもって天下を制するというような意味か。

11 風林火山・・・元々は孫子兵法か何か。戦国最強の部隊を率いた武田信玄の軍旗を今回は流用。戦争における行動の仕方を示したものだ。

12 桃園・・・実際に（正史で）あつたかは定かではない。が、演義屈指の名場面なのでね。やっぱりあつたほうが面白いと思いましたので。

### 第3話 出会い（後書き）

進まない……。若干グロ描写申し訳ない。

ちよつと長旅の用事があつたので更新できませんですすみません。反董卓連合や三国鼎立のあたりまではだいたいプロットはつくっていたのですが……。

このペースだとどれくらいかかるか予想がつかないですね。すみません。

次回いつ更新できるかはわかりませんが、未永くよろしく願います。

たまにタグの追加・変更しますので悪しからずご了承ください。

それと、投稿後10分前後は誤字・脱字チェックなどで若干内容が変わります。どうかご承知おきください。

どうしても会話文が多くなるなあ……。そして、鈴々の会話を書く書き方が難しい……。

## 第4話 結盟（前書き）

PV・アクセス、評価ポイント、お気に入り登録など、評価、見させていただいております。

読んでいただいている読者様に感謝です。

本当に嬉しいものです。ありがとうございます。



## 第4話 結盟

「ここから5分ほど歩くと桜桑村という村があります。そこでご主人様にこれからのことについていろいろ考えていただきたいのですが……。」(1)

歩いて村（桜桑村というらしい）に行く途中、そう桃香がきりだしてきた。まあ、俺のポジションは軍師っていうか指南役っていうかそんな感じだから、まあいいんだけど。

「そうだね。でも、まずは腹ごしらえだ。そして、俺たち5人で天下を統べるという結盟をしよう。ただ、俺と甄は天下を統一したら、また天界に戻らなくちゃいけないんだけど。」

「そうですか……。」

桃香と、愛紗までもが悲しいような顔をする。まあ、それが俺の天命<sup>だめ</sup>だから仕方ないのだけど。

「まずはご飯なのだー！。鈴々はお腹がすいたのだー！」

「じ、こら。はしゃぐな鈴々。」

一人元気な鈴々。そして、それをなだめる愛紗。うーん、いいコン

びだ。

そうこうするうちに、村が見えてきた。乱世ではあるものの、比較的どかな村のようだ。

「あれが桜桑村かあ……。」乱世”とは言うものの、ここは結構静かな村のようだね。」

「そうですね。北に白露<sup>はくろ</sup>ちゃん、南に袁紹さん、南西には曹操さんがいますからね。なかなか手が出せないところなんですよ。それにここは私の生まれ故郷でもあるんです。(2)母から預かった一族の形見、中山靖王、劉勝の末裔であることを示す唯一の物、”靖王伝家”を預かったのもここですし。」

そういつて桃香は一本の小刀（とはいえ、ナイフみたいだ……）を取り出した。

「これがそれか……。ところで、白露ちゃんって誰？」

まあ、多分公孫？だろうと予想はつくけど。

「あ、すみません。白露さんは公孫？さんのことで、ここから北、幽州の北一帯の刺史をしてるんです。盧植先生のところと一緒に勉強していたんです。」(3)

やっぱりね。にしても、真名言われると困るわマジで。

「また”真名”か……。頼むからやめてくれよ。また殺されそうになったらたまらない。」

「い、ごめんなさい。」

次はとりあえず、そこに行こうか。関羽と並び立つ至高の將軍もいるはずだし。(4)

そんなことを考えながら歩いてみると、ようやく村に着いた。

五銖銭をチャラチャラさせながら、桃香に尋ねる。

「このくらいの金だと、どれくらいご飯食べたりできる？あるいは馬買うには何枚くらいいる？」

俺の手持ちは50枚前後。

「そうですね……。馬は一頭で800枚分くらいはするんじゃないでしょうか。食事はだいたい2枚くらいですかね。ちなみに、お酒を買うのには3枚くらいです。」

「だと、けっこう使えるね。さて、オススメの食事処は？」

末路には哀れみを憶えながらも、たくさん貯めていてくれたゴロツキには感謝だ。さて、メシ食べよう。

のんびりご飯を食べながら、これからについて相談。

「桃園で結盟し、その後はどうされますか？」

そう愛紗が訊いてくる。まあ、俺の腹は決まってるんだけど。

「とりあえず、公孫？さんのところに行こうかと思う。桃香の知り合いだつていうから、そのコネで客将としておいてもらえるかもしれないし。そうすれば”実戦”の感覚を掴めるしね。公孫？さんのところに着くまでは山賊を狩ってお金を稼ごう。」

「さすがご主人様。多分白露ちゃんなら客将でおいてやるって言ってくれますよ。」

「鈴々、食べてばかりいないで少しは考えたらどうだ？一人で三分も食べたのだぞ……。」

感嘆する桃香に、呆れる愛紗。まあ、これだけ食べればねえ……。  
「難しい話はお姉ちゃんたちでしてくれればいいのだ。鈴々は元気に戦うだけなのだ。」

潔いというか何というか……。

「ハハハっ。まあ、いいんじゃないか？」

「あ、あまり甘やかさないでください。」

もう笑うしかないね。

食事に12枚ほど使い、徳利入りの酒と盃に5枚。大切に使わなきゃな……。貴重なお金だ。

「桃園はあそこですよ。」

そう桃香がある方向を指さすと、桃の咲き乱れた場所が見える。あそこが桃園か。

「ほう……。なかなか美しいな。風雅な場所だ。」

女？でさえ感嘆。俺もさすがに圧倒される。凄い……。

「誓い」なんだけど、俺たち二人はこの国を統一したら、天界に戻らなきゃいけない。盟約は3人で結ぶのと5人で結ぶのと同じよ。そして、桃香、キミのその双剣の一本を俺にくれないか？これが、俺たち2人が盟主であることの証明になる。桃香に剣がもう一本必要なら、とりあえず俺のこのボロ剣を使ってくれ。」

そう、俺が提案する。

「……わかりました。まあ、別に私は二刀流ってわけじゃないですしね。」

少し悲しそうな顔をし、その後、取り繕ったような笑みを見せる桃香。

二刀流じゃないのになんで2本も剣をもっていたんだろう……？  
っていうのはおいておいて。

「まず、俺が見届けよう。」

「はい。」

3人同時に返事し、武器を合わせ、同時に。

「我ら三人、生まれし日、時は違えども、兄弟の契りを結びしからは、同年、同月、同日に死せん事を願わん!!」

と誓う。三国志でも屈指の名場面だけに、立ち会えたことに感動。

そして、

「我ら五人を柱石とし、天下を義と法で統一し、安寧たる国家を建国することを誓う!!」

そう言った俺に合わせ、5人の武器を合わせる。

そして、酒を飲み交わす。

俺はこっそり女？に耳打ち。

「へえ。仙人でも酒を飲んでいいのか。」

「う、うむ。”聖水”などというがな。無益な殺生ではないのでな。仙界にも娯楽は必要じゃ。」

焦った顔の女？がかわいい。

あっという間に徳利の酒はなくなり、桃園を見ながら酔い覚まし。

酔いがさめ、あとは出発。

「とりあえず、山賊を狩り、金や塩を奪いながら公孫譚さんのところに向かおうか。」(5)

「そうですね。ところで、ずっと気になっていたのですが、その主人様の袋には何が入っているのですか？」

そう愛紗が訊ねてくる。袋……？ああ、このカバンのことか。



「ああ、これは天界のカバンだね。筆記用具とかが入っているんだよ。そのうち見せてあげるよ。水に濡れても中には染みないようになってるんだ。」

「す、凄いですね……。」

感嘆する愛紗。まあ、天界の技術は2000年先の代物だしねえ（

6）

さあ、出発だ。

## 解説

1 桜桑村さくらそうそん……実際にあったかは定かではない。多分存在しない。が、面白いから採用。元ネタは無双シリーズ。今作では劉備の生まれた地ということに。

2 白露はくろ……公孫こうそん？の真名。白蓮はくれんだと”蓮”がつかわれまして、これは孫家の人の真名にのみ使いたかったので、やむなく変更。

3 刺史しし……今でいう県知事みたいなものだと思ってください。官爵は細かすぎてわからないです（将軍位も）が、有名なのは使います。

4 次回かその次には登場します。まあ、多分簡単におわかりになつてるでしょうが（笑）

5 当時は、塩・鉄・酒が専売制をとられていまして、密売商人がけっこう居たといえます（関羽も関わっていたとか）

6 正確には1800年ほど先です。

## 第4話 結盟（後書き）

なかなか進まないのはいつものこと。決して描写が細かいわけじゃないのに、なぜ進まないのでしょうか？

それとも、こんなものですかね？

次回で公孫讚と会つとこまでいけるといいと思います。

## 第5話 意気投合。そして旅立ち（前書き）

2011年10月25日現在、総合PV8339 ユニーク1850  
評価pt24 お気に入り登録12件です。

本当に嬉しいです。読者様には本当に感謝しております。これからもよろしく願います。

あ、ちなみに、三国志キャラの本名変換は殆ど、「真・三国無双online」にて偶然、「辞書ファイル」なるものが配布（ゲームに付属）されておりまして、それを勝手に流用させて頂いております。

まあ、二次創作ですし、「真・三国無双online」も実際に私がプレイさせて頂いているので、問題はないかと思えます。

無料でもある程度遊べますので、本家気に入った方は特にオススメですよ。プレイしてみてください。

他はそのまま出たり、直接出ないもの（鈴々など）はATOKに単語登録して使っております。一部手書きパレット使ったりHP（Wikiなど）からコピペすることもあります（笑）

そして、誠に勝手ながら、並行して「セレブでミステリアスな学園生活」を連載させて頂くことにしました。恋姫は時系列で夏休み前日からの開始ですが、こちらはその前（春〜夏）とその後（夏〜）を描く作品です。

今作にたまに「早坂さん」だの「藤田さん」だの出てくるので、イメージ掴みやすいように連載させて頂くことに致しました。興味ある方はご一読ください。検索はタイトルか著者名などからどうぞ。

## 第5話 意気投合。そして旅立ち

さっさと公孫？のどこ行こうかなとは思ってたんだけど、もう夕暮れだなあ……。酔い覚まししてたらいつの間にか時間が経ってしまった。

ここはいつそ……。

「公孫？さんのとこすぐ行こうかと思っただけど、もう日が暮れそうだし、いきなり夜道行くのは、俺が非力だから、いくら甄や愛紗に鈴々がいても危ないし、今日は桜桑村に泊まっていかないか？  
幸い、お金はあるし。」

「そういえば随分暗くなってきましたね。それに、ご主人様と甄姚様の蚊帳もないですし……。」（ 1 ）

「ん？ああ、我々の心配は不要だぞ。私の術で虫などを防ぐ膜のようなものをつくれるのでな。」

愛紗の心遣いに、女？が一言。

仙人便利すぎるだろ……。元の世界に戻ってもたまたま呼び出せるといいな……。ドラえもんみたいに。

「私を便利屋扱いするとはお前、無礼にも程があるぞ。まあ、今は仕方がないが。」

あつさり俺の思惑を看破。何で？ 読心術でもあるのか？

「……………心を読むことはまあ、出来なくはないが、そういう術の使用は厳格に制限されておるのだ。おいそれと使えるものではない。顔でわかるわ。にしても、お前少しは感情を表に出せんようにできるのか？」

う……………それを言われると辛いな。不動先輩や早坂さんたちからも言われてるんだが、俺の欠点なんだよな。なかなかポーカーフェイスは難しいんだよな……………。

「そうなのか、まあ、徐々にできるように頑張るよ。」

「さすがは”天の御遣い” 凄いいことができるんですね、流石です。」

桃香と愛紗が感嘆している。まあ、俺でも驚くわ。ハリポタ以上だよ。多分。

「まあ、どちらにせよ村で一泊しましょうか。おそろくまだ泊まることのできる場所があるでしょうし、仮に無ければ村の外れに野宿できる場所がありますから。桃香様の生家も昔はあったのですが、乱世終結の為の資金として全て売ってしまったのですよ……………」

すごいな桃香。それだけこの乱世終結にかける思いは強いってことか。俺もやっぱり頑張らなくちゃな。

「桃香は凄いんだな。じゃあ、これから宿に行こうか。」

「そうなのだ！桃香お姉ちゃんはすごいのだ！！」

「いえいえ……。大したことじゃないですよ。鈴々もそんなに褒めなくていいから。」

そして、宿をとり、また飲む……。酔ってます。未成年が。まあ、ここの法律なら問題ないだろ……。と思っていたら、なぜか男2人と意気投合……。酒まわってきたからか喧嘩気味だがな。誰ですかアンタらは？

「この乱世をお前ら5人で統一なあ……。そんなバカ共が俺あ好きだぜ。だーっはっは。」

「まったくだ。しっかしおもしれえな。しかもすげえ美女に酌してもらえるなんて最高だな。」

なりゆきで女？が酌。まあ、「昼間呑み過ぎたので夜は呑まぬ。」と言ったからだから自業自得だけどな。

しかし誰だろうか？

「バカとは何なのだ！？お前ら失礼なのだ！」

「全くです。我らがやらずして誰がやるというのです？それにして



もさつきからご主人様は何で黙っているのです？」

怒る鈴々と愛紗。

「……まあ、事實は事實だろう。大言壮語にも程があると思われても仕方ないさ。が……、それでも決めた以上必ず成し遂げるだけだ。どれほど笑われようとも。」

「だーっはっはっは。気に入ったぜ。馬と兵士と金を集めてやるよ。俺あ商人だからな。ただし失敗したらタダじゃおかねえぞ。俺は張世平。コイツは蘇双。商人だ。」(2)

張世平に蘇双、マジかいな……。パトロン get か。しかし、俺たちはついてるな。あのまま行ってたら彼らには出会わなかった。

「そりゃありがてえが、俺たちは公孫讚のところに行くのを変えはしないぞ。そこで少し訓練もしたいし、劉備との縁を強化しておけば後に役に立つしな。」

「んなことはお前らの好きにすりゃあいさ。俺たちあこの乱世が終わりゃあそれでいい。そこに一石を投じるなんて面白えじゃねえか。」

「今日は同じ部屋で寝ねえか？おめえは面白え。語り明かそうぜえ。おめえの見る未来。」

「そいつはありがたい申し出だ。ありがたく一緒に過ごさせてもらっぜ。」

一緒に寝るなら好都合だ。さすがにこれだけ飲み食いして徹夜は嫌だからな……。

「ご主人様！？いいんですか？じゃあ私たちの部屋は？」

「一つは君が、残りは愛紗たち2人で使ってくれ。俺らは雑魚寝だ。」

「さて、ちと用足し行くかな。残り食べておいてくれよ。」

「……。私も行くとするか、一応”護衛”だしな。」

トイレに行くというと、女？もついてきた。まあ、予想通りだが。

しかし、トイレ「小川の上かよ……。ガンジス川じゃないんだがな……。まあ、それが古い時代の証拠でもあるが……。」

「どういってもりだ？あっさり申し出をうけるならまだしも、一緒に寝るなど。寝首をかかれる可能性もあるのだぞ。」

「逆だ。あんなところで大声で話されると、いくら辺境で治安が安全なトコといっても危険だ。あの2人は正史でも劉備たちのパトロンになった人物。そんなに問題はないはずだ。まあ、万一そうならお前が返り討ちにすればいいだけの話だ。」

「なるほどな。一番足りない”人脈”を強化して金銭も得られるならたしかに好都合だな。」

「まあ、そうなるな」

そして、……。未来を語り明かすのはまた今度になった。俺も彼らも酔いつぶれて寝ちまったから。ただ一人、女？を除いて。

翌朝、まあ、取り越し苦労だったか。

「目覚めはどうだ？久々に寝たんじゃないか？」

「まあまあかな。しかし、藁の布団は肩が凝るなあ……。見張りお疲れ様」

「そんなものだろう。藁ではな。」

「さーて、んじゃあ待ってる。少しな。」

「ああ、分かった。」

張世平達が今から馬と兵隊を集めてきてくれるらしい。1時間ほど待ってるという話だった。そして裏に繋いでいた馬で何処かへ向かっていった。

「ご主人様、彼らを信用したのですか？もし大量の敵兵を集めてくるとしたら……。この村まで危険にさらすことになります。いくら我らは村の外で待っているといっても。」

「その不安はわからなくてもないが、愛紗。まあ、敵だったとしても

馬は手に入る。返り討ちにすれば済む話だ。まずは待とう。」

「あ、戻ってきましたよ。」

ドドドド……という音とともに、馬に乗った兵と馬車1台。張世兵たちの姿も見える。

「あんまり人はあつまらなかったが、金と馬はきちんと集めてきたぜ。どうだ？」

「すごい……。」

桃香と愛紗が感嘆している。俺もさすがに驚く。馬自体は早坂さんのところで乗らせてもらったサラブレッドほどじゃないが、肉付きもいい。

あの時鞍無しでも乗れるまで練習しといて良かったなあ……。としみじみ。こんなところで役に立つとは。

「おめえらが5頭。残りは俺と蘇双を合わせて52人の兵と馬だ。馬車はここで売ってもうすこし金にするか。まあ、食い物と水は補給したしな。公孫？は幽州の東。まあ、数日で着くだろ。馬なら」

「お前は一人で馬に乗れるか？」そう女？がこっそり耳打ちする。

「ああ、なんとかな。」と俺は答える。

そして、ついに公孫？の領地につき、居城へ到着。足がガクガクです。なんでも、盗賊がのさばっているらしく、募兵やってみました。

馬持ちなので、あっさり公孫？との面会許可。

そして、刺史の間へ。張世平たちは馬の世話と食い物の準備。来たのは俺たち5人。

「桃香！ひっさしぶりだなー。」

「白露ちゃん！久しぶりだねー。元気してた？」

「廬植先生のところを卒業して以来……3年振りか。勿論元気いっぱいだよ。」

「それって？でも刺史になるなんてすごいよー。」

いきなり桃香と公孫？のおしゃべりスタート。ピンク×ピンク。ん？後ろにいる人物が気になる……。まさか……。な。

そして15分経過……。まだ昔話が続く。愛紗も呆れてる……。

「おい桃香、そろそろ本題に入らなきゃ。」

「ん？そっぴやお前は？桃香が真名許すつてことは結構な人物なん

だろうが。」

「ご主人様のこと？いろいろ噂されてた”天の御遣い”の北郷一刃さんだよ。」

「てつきり眉唾だと思ってたが……。まあ、桃香が認めるならそれなりの人物なんだろうな。友の友は友。私のことも白露でいいぞ。ところで、残りの3人は？」

あっさり真名許す方もいらっしやるんですね。甘いのかお人好しなのか、はたまた……。。

「ああ、俺の護衛の甄姚に、関羽と張飛。」

「特にそれ以上何も言うことは無いのだが。甄姚だ。以後よろしく。」

「我が名は関羽。字は雲長。桃香様の矛です。以後、お見知りおきを。」

「鈴々は張飛なのだ！すつごく強いのだ！」

「あ、ああ、宜しく頼む……。と言いたいとこなんだが、正直3人の力量がさっぱりわからん。どうなんだ？桃香。」

愛紗と鈴々の実力くらいなら分かりそうなもんだが……。女？はまあ、何もかも抑えてるからな。それでもこの3人で一番だろう。

「みんなすつごく強いよ。わたし、胸張って保証しちゃうよ。」

「たしかに桃香の胸くらいあれば安心なんだが……。」

大丈夫かこのお方？所詮袁紹に負けて散ったお方はこんなものか……。

「この3人の実力がわからぬようでは、やはり公孫？殿は大した実力ではありませんな。」

すっげー物言い。客将ですか？

「相変わらず嫌味つたらしい物言いだな。まったく……。しかし、お前ならばこの3人の実力が分かるというのか？趙雲」

え？趙雲？マジで？聞き違いだよな？

「趙雲？」

「いかにも、常山の趙子龍とは私のことです。立ち居振る舞いを見れば只者でないということぐらいはすぐわかりますよ。それに、北郷どのもなかなかの腕のようだ。」

ついに来た。わざわざ蜀を選んだ理由。他国からでは絶対に引き抜けないヤツが。蜀最高の將軍の一人だ。

「それは随分光栄だけど、キミの腕は俺とは比べものにならないと思っよ。」

「ええ。かなりの使い手のようですね。今度手合わせ願いたい。」  
という愛紗。やはり強い者は強い者に惹かれるのだろうか。早坂さんや藤田さんみたいに。

「しかし、白露ちゃんに対してずいぶん物言いだねえ。」

「まったく、これで腕が立たないなら追放してやりたいが、兵千人に値する武人だし、軍略にまでうるさくケチつけるんだが、これがまた、言うこと聞くと圧勝だからな……。」

「ほう……。しかし、たしかに戦は武力だけでは決まりませんよ。勝敗は戦う前に決まっていると言う方もいるくらいです。」

「軍略ってどこまでだろう？さすがに陣形は決めるんだろうが。まあ、俺には好都合。何としても引き抜く。そのためにわざわざこんなトコに来たんだから。」

「ほう……。それは興味深い。その要因はいったい何です？」

「兵站・陣形・戦略、そして何よりも大切なのは団結だ。蟻でも馬は倒せる。」

のってきたか。ここには象はいないから馬にしたけど。

「なるほど。なかなか面白い方ですな。」



「それはありがたい。」

と、そのやりとりを横で見ていた白露さん。

「おいおい、ウチの客将を引き抜こうというんじゃないだろうな？」

「まさか。まあ、来てくれればいいなあとは思いますが。乱世終結の為に圧倒的な武力があればそれは早期終結につながりますし。そのうえ軍略にも造詣が深いようですし。」

「おやおや、ありがたい申し出ですな。まあ、私は主君の徳を見て判断させて頂きますよ。果たして北郷殿にどれだけの徳があるか」

「無いと思うよ。徳云々は桃香、ああいや劉備のほうがある。俺は主君でもないしね。あくまで補佐。黒子に徹するさ。」

「え……。」

「ほう……。それは興味深い。まあ、少し様子を見させて頂くとしましょう。」

「まあ、ゆっくり鑑定していつてくれよ。」

そりゃあ、超利己的で「漢王朝を叩き潰す」と思ってる人間に徳なんぞあるはずがない。まあ、俺なりの指針はあるけどな。大義という。

さて、今日はどうするか。桃香たちはショックを受けてるようだ

が。

「さて、白露殿、今日はどうするといいい？できれば長旅の兵と馬を休ませてやりたいんだけど。」

「ああ、戦は明日以降だ。騎兵は数が少ないから頼りにしてるよ。」  
さて、じっくり休むか。殺し合いに踏み込むのは気が進まないが、まあ、仕方がない。

## 解説

1 あったかかどうかは知りません。ただ、野宿で何も無しで寝るのはどうか・・・（仮にも女の子ですし）と、おそらく似たものが無いと大変だろうな・・・と思ったので。

2 劉備たちに力を貸した豪商です。彼らのお陰で劉備たちは黄巾賊と（一応）戦えました。ただ、今回は騎兵50。これにいつものメンバー5人と張世平・蘇双で騎馬57。これはやりすぎかもしれない・・・。

## キャラクター紹介

公孫？ 字は伯珪 真名は白露

白蓮だと、”蓮”がつかわれまして、コレは孫家の真名にのみ使いたかったので、やむなく変更。

正史では異民族”烏丸”との戦争に明け暮れ、”白馬長官”とあだ名される戦好きだったらしい……。なぜか（戦場では目立って危ないはずの・・・）白馬に乗って戦った為。

”あの”袁紹に負けして、自殺にも失敗する情けない將軍……。  
（結局袁紹軍の兵士のよって殺害）

ところが本作では、やっぱり白馬には乗るものの、劉備に負けず劣らずのお人好し。

何でもかんでも中途半端な存在……。恋姫（無印）と違って死にはしませんのでご安心ください。

まあ、憎めない奴だと思っていただければ。

数値は、60・60・60・60・60。

趙雲ちゆううん 字は子龍しりゆう 真名は星せい

おそらく、使う側（劉備や諸葛亮、失礼な物言いをお許しください）にとって非常にありがたい存在の將軍だったと思われる。穴のない活躍で、ミスなく謹厳実直。おまけに金や女の強欲さもない。

夷陵の戦いでは劉備に真つ向から反対するなど、非常に人格的にもすぐれた將軍。

長坂で劉備の子（劉禪）を助けだし、劉備にその豪胆さを

”子龍は一身全て、これ肝なり”と賞賛される。

個人的には豪胆さにくわえ、お前はわれわれの肝（最も大事な將軍の一人）だよ。という意味を追加したいと思つてます。

青せいの剣けんを長坂で敵將から奪う。

無印版では始めに一人で無謀にも突撃するアホに成り果てたが・・・。

本作ではそんなバカはやりません。一刀が最初に言った「5人の最強の武人」の関羽に続く2人目。（残り3人はまだ秘密。ヒントは、全員の共通点が最初は曹操にも孫家にも劉備にも味方しなかつたです。その後どうなったかは3者3様。）

彼女はめっちゃ活躍させる予定。

数値は、100・100・80・75・55。

## 第5話 意気投合。そして旅立ち（後書き）

鈴々の出番少ないですね……。ファンの方、特にごめんなさい。

戦いとのおんびり動物と戯れるトコでの活躍は相当考えているのですが、他はなかなか難しいです。

そして会話のみのところが多かったなあ。結構進みました。

これからは1週間から10日に一度更新出来ればと思っています。

## 第6話 格（前書き）

公孫？の”さん”の字を間違っております。

讚と書いておりましたが、正しくは？です。

訂正致しましたが、誤字申し訳ありませんでした。

小説書くたびにアクセス数がかなり増えるのでとても嬉しいのと、  
だいぶ話が考えられたので予定より早く投稿できました。

## 第6話 格

「ご主人様！！ 私より人望があるってどういことですか!？」

「ご主人様が居るから我らの大義が果たせるのです！それは即ち・  
」

桃香も愛紗ももの凄い剣幕だ。まあ、こうなるだろうとは分かっていたけど。ちょうど良い機会だ。俺たちの立ち位置をきちんと決めなければ。

俺は愛紗がさらに何か言おうとするのを遮り、

「事実としてそう言っているだけだよ。主君としては桃香のほうに相応しい。俺は参謀、あるいは桃香のやりにくいことをするような立場のほうがいい。一応形式としては俺と桃香の立場は同じ、主君になってはいるけどね。俺は太平の世が築ければそれでいいし。そのための手段としてあくどいこともやらざるを得ないだろうけど、桃香にはそういう役はあまり似つかわしくないと俺は思うからね。」

「それは……。しかし、我らの主はご主人様であることは変わりません。それだけはどうか。」

「ああ、分かっているよ愛紗。それはとても大切なことだから。」

「ところで、ここからどうなさるおつもりですか？ずっと公孫讚殿の元においては天下統一は困難だと思うのですが……。」



「それは勿論だ。けど、有能な将を手に入れ、兵を増やし、実戦の経験を積まなければ、これからの飛翔は望めない。」

「ということは・・・あの趙雲という将を配下に収めるつもりですか？」

「できればね。まあ、それよりこの華北の地の状況が知りたいかな。彼女以外にも群雄はたくさんいるんだろうから。」（1）

確かに趙雲を引き抜くのは当然なんだけど、それより大切なのが軍師だ。軍師。劉備が蜀を手に入れるまで殆ど敗北続きだった最大の理由は軍師の不在。徐庶加入までは口クナ軍師が居なかったことが敗北の最大の要因。まあ、あとは場所が悪かったんだよなあ。最初は曹操・袁紹・公孫？に挟まれ、次は徐州、曹操が最も恨んでいた地だ。荊州は孫権と争い・・・。成都（蜀）を手に入れるまで安息の地は無し。

これで勝つのは至難の業だからねえ。許昌行って曹操より先に引き抜けば軍師は問題なさそうな気もするけど、相手はあの曹操だしなあ・・・。果たしてどうしたものか。

「とりあえず休もうか。ここは治安もいいからゆっくりできるんじゃないかな。」

そして用意された部屋で女？が一言。

「ずいぶんと度胸がついたな。表情があまり顔に出なくなった。何かあったか？」

「ああ。思い出したただけだ。はつたりの大事さを。」

そして翌日、白露からの指令により、俺たちの初陣は明後日に決まる。

今日はどうしてもやりたいことがあるので、町外れにて集合。みんな武器持ちで。

「ご主人様、今日はいったい何の用ですか？わざわざ武器持参などと。まさか公孫？殿のところの殴り込みに行こうとでもいうのですか？」

「いや、まさか。ただ、今日は愛紗と手合わせして貰おうかと思っ  
てね。結局、こっち来てから一度も戦いはしてないから。」

「……。そういうことでしたか。しかし、怪我の心配は大丈夫  
ですか？ご主人様に怪我されたら困るのですが。」

「それは、俺が怪我しそうになったら甄が止めてくれるから大丈夫  
だよ。なあ？」

そう言うと、女？は問題ないと頷く。

「分かりました。ならば、全力でやらせて頂きます。」

そして、愛紗は変貌する。優しい女の子から覇気を剥きだしにした  
戦士へと。でも、それで臆する俺じゃない。祖父に鍛えられた剣術  
はこの3ヶ月で俺は更に強くなった。不動先輩の柔。そして早坂さ

んの剛柔一体の剣道と気迫。どの程度通用するかはわからないけど、俺の全てをぶつけるだけ。

「じゃあ、桃香、開始の合図を頼むよ。」

「あ、はい。じゃあ、……始め!」

そして……。

「はああああーっ!」

互いの先制の一撃が交差し、愛紗が2撃目を繰り出し、俺も対抗しようとしたそのとき。

「そこまでだ。」

女?の無情な声が響く。

「な……。」

愛紗の呆然とした声。切っ先を指2本で止められたんじゃない。そして、落ちる俺の剣。

握力不足。一撃で手は痺れ、俺の負け。女?が止めなかったら死んでたかな。ハハ。

ここまで圧倒的だともはや笑うしかない。「柔よく剛を制す」とはよく言ったものだが、圧倒的な力の前には力を持たぬ者はかなわぬ」とあの人が言っていたのを思い出す。

そして、酔狂な声。

「あの一撃を受け止めるとは、”天の御遣い”の呼び名は飾りではないようですな。そして、あれを指で止めるなど、甄姚どのはやはりタダ者では無い様子。しかし、私も関羽どのとは一度手合わせを試みたかったですよ。いかがですかな。」

「望むところだ。受けて立とう、趙雲殿。」

愛紗vs趙雲か。これは凄い。関羽・趙雲……。ゲームではほぼ同等の能力値に格付けされた武人。はたしてどうなるのか。

「では桃香さま、始まりの合図を宜しいですか。」

「いや、ちょっと待ってくれ。ここは俺にやらせてくれ。」

「ご主人様！？ もう大丈夫なのですか？」

「”怪我”じゃないからね。手はまだ痺れてるけど。じゃあ、3・2・1・始め！で合図するからね。わかった？2人とも。」

「承知。」

「わかりました。」

了解の合図をする趙雲に愛紗。どうしてもこの2人の対決は間近で見たい。

そして始まる2人の手合わせ。愛紗は青龍偃月刀。趙雲は鎗。紅い鎗だ。

思い知る。”格”の差を。

愛紗の重い一撃を受け流し、その力を利用して反撃に転じる趙雲。それを紙一重で躲し、そのまま相手の切っ先にたたき込む愛紗の技術。

力も技も圧倒的。これが……どこか、”彼女達は女の子だから”という思いがあった。でも、それは思い違いだと知る。

この世界においては、女>男。もし、俺の世界に行けば男以上の力を出して渡り合うかもしれない。細身だから、可憐な少女だから、それは彼女達にとって弱点にはならないということ、目の当たりにして初めて理解する。しなる腕。自在に、武器の特性を理解して使いこなす偃月刀に鎗。まさに別格の強さ。

そして、決着。

「次も私が貰います。ご主人様や桃香様が見ている限り、私は他の軍の将には負ける気はしません。」

「次もこのままだとは思って頂きたくはないですな。しかし、私の真名を預けるのには相応しい相手のようだ。私は常山の昇り龍、趙雲。字は子龍。真名は星。この愛鎗、紅染鎗（こゝろにそう）で次は貰いますよ。」

「紅く染める鎗とは物騒だな……。俺は北郷一刀。今後はよろしくな。」

「私は関羽。字は雲長。真名は愛紗。また闘おう。この青竜刀に賭け、負けはしない。」

「鈴々は張飛。字は翼徳。真名は鈴々なのだ。愛紗ばかりずるいのだ。鈴々も闘<sup>や</sup>るのだ。」

「私は劉備。字は玄德。真名は桃香です。よろしくお願いしますね、星さん。」

「私は甄姚。北郷の護衛だ。ところで、その。いつまで覗いてるつもりだ？」

「う……。いいじゃないか別に!!この肉まん<sup>と</sup>メンマ<sup>買</sup>いに来たら打ち合<sup>い</sup>やつてるから見たらお前<sup>ば</sup>っかり真名交換<sup>し</sup>やがって!。」

メンマ……。?

「では白露殿も交換すればよろしいではありませんか。しかし、お。あの店のメンマは天下一品。私のために買っていただけるとはありがたい限りですな。」

そしてハムハムとメンマを類<sup>ば</sup>る趙雲、もとい星。何だこのキャラの変わりようは?

「う……。じゃあ改めて。私は公孫?。字は伯珪。真名は白露だ。」

ほれ、お前らも肉まん食べるか？」

素直なお方ですな。しかし、何でメンマなんだ？肉まん美味しいな・  
。。。

「星？そのメンマは？」

「ああ、私はメンマが大好きですな。ここの職人はかなりの腕でしてな。すばらしい壺に漬けるのですよ。白露殿はそれをタダで提供して下さるといっているので、つい手を貸してしまつのですよ。」  
(2)

そんなアホな理由かよ。。。しかし、壺つてまさか。。。。

「腹ごしらえも済んだし、愛紗、星、今度は鈴々と勝負なのだ！！」

「まったく。。。星、私が先にいかせてもらつぞ。」

「うむ。次は私だぞ。」

今度は鈴々vs愛紗、星か。史実では、関羽>張飛・馬超 だと諸葛亮が手紙で書いてた気がするけど、あれはご機嫌取りだって説が有力だしなあ。。。 (3)

まずは、愛紗vs鈴々。

鈴々の実力はわからないけど、間違いなくかなりの腕のはず。

だが、あの愛紗相手に通じるのだろうか。

「・1・始め!」

「うりゃうりゃうりゃ〜。」

「くっ」

単純な、力。なんてシンプルな。それだけであの愛紗を封じてる。

愛紗の強さは力55%に技巧45%といったところ。まあ、いつでも圧倒的な力なんだけど。鈴々の場合は力90%に技巧10%といった感じか。技巧というよりも気合いのような気がするけど。

そして、決着。愛紗の刀が地に落ちる。

「よし!勝ったのだ。」

「っ!」

「3人とも凄い、いや、凄すぎるな……。まあ、4人か。1人あり得ないのが居るが……。」

「そうだね〜。白露ちゃん。まあ、あの人は甄姚さんだからしょうがないよ。」

それは全く理由になってないぞ。桃香さん……。



「フム。次は私ですな。」

次は鈴々vs星。

星は力50%に技巧50%。愛紗よりさらに不利なはずだが……。  
何か策でもあるのだろうか？

「始め！」

「うりゃうりゃうりゃ〜。」

当然のように突っ込んでくる鈴々。に対して、星も突っ込んだ。構えずに。

「な……。」

俺と愛紗の啞然とした声が響く。

「確かに力は素晴らしいが、下がガラ空きですよ。」

足払い。長くて重い得物を持つということとは、確かにバランス保つのが難しいってことだが……。

「わ、わ。」

そして、一閃。あっさりと鈴々の矛が落ちる。

パチパチパチ……思わず拍手する俺。鮮やかすぎる。相手に自

ら近づき、踏み込んだほうの足を払い、バランスを崩したところにするかさず一撃。見事としか言いようがない。

「むー。ズルイのだ、星。」

「ここまで鮮やかだと、褒めるしかありませんな。仕方ないぞ鈴々。しかし、これでは我らの中で誰が一番強いのかわからないですね。。。」

「それは決まっているではないですか？のう御遣い殿？」

「？ご主人様ですか？」

「いや、その隣ですよ。一度手合わせしたいような気もしますが、しかしアレでは。。。流石に勝てぬでしょうな。」

「ああ、甄姚どのか。まあ、確かにそうですね。」

クスクス笑う星に愛紗。

まあ、確かななあ。。。無敵だからねえ、このお方は。

そして、俺は気になることを確認に行くため、白露に質問。

「なあ白露、その肉まんをメンマ売ってるところってどこにあるんだ？」

ん？泣いてる？

「そりゃ、私は幸薄いかもしれないけど。。。もうお前ら仲間

になったようじゃないかー。ん？肉まんもメンマ？ああ、その角曲がったところだぞ。肉まんとか焼売屋があつて、向かいにメンマとかキクラゲみたいなやつを売ってる店があつてな。乾物も味のついたのも両方売ってるんだ。両方の店ともかなり美味しいぞ。」

まあ、確かにめっちゃ打ち解けてるからなあ……、しかし……。

走って確認に行く俺。やっぱりか。

「どうした？」

「なんでこの壺がここにあるんだ！！これは俺の世界で展示されてたやつだぞ！！」

思わず声を荒げそうになるが、何とか大声は出さずにすんだ俺。あれは間違いなく早坂さんがバカにした壺。まさか本当にメンマ漬けてあつた壺だとは……。

「心配せずとも、もう、お前のいた世界には、この世界に入る起点は無い。」

「だって、あの壺は、鏡は……。」

「外史とはいわゆるパラレルワールド。文化的なレベルが同じ時代には同じ物がつくられるのが道理。」

「ってことは、あの壺は……。」

「あれはお前達の世界で過去につくられたもの。ただし……鏡は

別だ。アレはこの外史のもの。イタズラ半分で起点を鏡に移しこんだバカがいたのだ。それがこの世界の管理者だというから笑わせるが。それをあの低俗な仙人共が盗んだ・・・はいいが、奪い返そうとした管理者とのもみ合いで落としてしまい、それがあの世界に行ったというのがお前が巻き込まれた顛末だ。」

どこから突っ込めば良いんだろうか・・・。

「えーっと、仙人って馬鹿が多いのか？」

「うーむ。連中は仙人というより、それより格下の道士に近い。退屈しのぎにバカなことをやろうとする連中も多い。何せ、仙人界は才能の世界。才能がなければどう頑張っても無理なものは無理だからな。」

「で、その管理者とやらはどうしたんだ？」

「2人いたのだが、1人は捕らえた。もう1人はこの世界でその奪った仙人共を捕まえると抜かしたので、とりあえずやらせることにした。まあ、いずれにせよ後で捕らえて裁くが。」

「てことは、お前の仕事は・・・。」

「お前の護衛と、その仙人2人と管理者1人の捕縛、そして、この世界で連中が”操り”の鍵としている4つの”鍵”を集めることだ。まあ、”鍵”は連中が全てもっているわけでは無いだろうがな。」

「そついうことだったのか・・・。」

「ご主人様〜。」

気づけば、愛紗たちがのんびり肉まんや焼売を食べていた。一人、星はひたすらメンマ食べてるが。

「大事な話のようでしたので先に食べさせていただきましたが・・・大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、愛紗。もう、やるべきことははっきりわかったから。」

その3人を捕まえ、”鍵”を集め、そして天下を統一する。それが俺と女のすべきことか。まあ、俺は天下の統一を第一に考えてるけど。他は女？のほうが専門だろうし。

1 華北：中国東北部。まあ、今作では、幽州・并州・冀州・青州あたりを指すとお考えいただければ。

2 本来は何か理由（恩？）があるらしいのですが、どうも明かされなかったような気がしたので。原作で何か記載あったらその時はすいません。というか、感想で教えて下さい。

3 马超が蜀に加入したと関羽が聞いた（当時、蜀（成都）には劉備・諸葛亮があり、関羽は荊州を任されていた）とき、諸葛亮に実力を聞く手紙を出し、返書には「張飛といい勝負。髡殿（関羽）には及びません。」と書かれており、関羽は大喜びで周りの人に見せびらかしたとか。本作の関羽はそんなキャラじゃないのでエピソード

ソートして採用しようがないので・・・。

## 第6話 格（後書き）

趙雲の武器の名前を完全に書くのを忘れておりました。

有名な武器の持ち主（正史・演義で）以外は考える必要ないかな・  
・と思ってましたが、趙雲の武器は明記しておこうと思います。

他はあまり考えませんが……。因みに、ネーミングはオリジナル  
（のはず）です。

三人の实力は三角関係にしました。鈴々のかけ声がどうも難しい。

趙雲は単なる力だけじゃなく小技も使う（原作でも恋を苦しめてま  
したし）ということとで。

にしても、戦闘シーンと理由付けには苦心しました……。

## 第7話 初陣（前書き）

更新が予定より早い理由はいろいろありますが、オリキャラ（史実にはいるけど・・・）の真名を考える猶予が欲しいのと、アクセス数の増加が嬉しいことですな。

次の話でようやくオリキャラ参戦の予定なのですが・・・。

ここの作品を読んだり、あるいは過去に読んだ作品のオリジナルの真名と被っていないかが結構怖いのですが、正直100%どの作品のどのキャラとも違う真名をつけるのは無理だと思いつながら書いてます・・・。

人名思いつくのが一番苦手なので。まあ、既視感以外でダブることはないように気をつけてはいるのですが・・・。

真名募集も考えましたが、そうするとそのキャラが出るのは確実（しかも近い話で）なのでそれはマズいと思いつりまして・・・。



## 第7話 初陣

そして翌日、俺が考えてた文句、武田軍の軍旗に使われてた（ 1 ）

”疾はやきこと風の如く、徐しずかなること林の如く、  
侵略しんりやくすること火の如く、動かざること山の如し”

の漢文版を愛紗が暗記してるという孫子の一節から引き抜き、

” 疾如風徐如林侵 ”

” 掠如火不動如山 ”

を軍旗に作成依頼して、見事完成。黒い旗に赤い字。相手も恐怖に思ってくれるんじゃないかな。

本来は

” 疾如風 徐如林 ”

” 侵掠如火 不動如山 ”

で、このままのほうが格好いいんだけど、文字数の関係でね。きれいな長方形にするにはコレしかなかったんだよね……。

そして、商人としての活動を再開させた張世平と蘇双には、猪とか豚、牛や馬を手に入れて、干し肉や塩漬け肉、そして皮を集めるように依頼。別に動物は痩せてても死にそうでもいいからと。

兵糧が米だけじゃなあ・・・というのと、やはり蛋白質摂取は肉が一番だからね。今は魚や肉の内臓を食べれば良いだけだし。

そして初陣の軍議が開始。ところが・・・。

「あの自己中人間はドコ行ったんだ！！ 盗賊討伐を今日行つというのは事前に通達したはず！！なのに朝迎えに行かせたら書き置き一つでどこかへ行方をくらませやがった！！ 今更臆したとでもいうのか！！」

「ご主人様、星は一体なぜ・・・？」

「大方、偵察だろう。戦は情報が命。あの星が単騎突撃なんてバカな真似はしないでだろうから。」

愛紗の問いかけにそう答える俺。なんでも、”私は野暮用ができました故、軍議は先に行っておいて下さい”という書き置き一つで星の部屋はもぬけの殻だったらしい。

「白露殿、先に我が軍の戦力を確認すべきかと。星殿が敵前逃亡などするようには思えませんので。」

「それもそうだな・・・。我が軍は総勢5500。それに北郷・劉備軍の兵が50。合わせた内訳は、騎兵が550。歩兵が5000だ。まあ、歩兵は装備をかえれば槍兵と弓兵にもなれるようになってるが。」

という話を白露がした時、星が到着。

「すみませぬな。騎馬では目立ちすぎます故、徒歩で行ったので時間がかかってしまってますな。敵の内情と地形はきっちり探って参りましたが。」

「お、おう。そうか。ご苦労。で、どうだった？」

「盗賊の一団ですな。兵数は1万程度であり、何人かの頭が集まっておる模様。」

「様にどよめきが起こる。まあ、兵力差は倍だからな……。俺は星の話を通り、質問。」

「星、統率と陣地はどうなんだ？」

「それをこれから語ろうとしておったのですが……。流石に目のつけどころが宜しいですな。全軍を統率する将はおらず、利害関係の一致のみで集まっているようですな。相手の陣は川の近くの林にあるようですが、誘きだせば平地にも来るでしょうな。平地は視界の良好な荒野のみですな。装備は剣が主。まあ、歩兵1万と違ってよいでしょうな。」

「兵力差は倍か……。なかなか厳しい戦になりそうだな……。と言つ白露。そうでも無いと思うんだが……。」

「平地にさえ誘きだせば勝利は確実なんだが……。さて、どうしたものか。」

「おや、北郷殿も同じ意見でしたか。ならばその役はこの星にお任せあれ。」

「危険だが、良いのか？」

「無論。この程度どうということもありません。」

「そうか。なら頼む。」

「おい、勝手に決めるなよ……。どうするんだ？」

「そういえば……。周りを完全においてけぼりにしてたことに気づく。」

「要するに、敵は歩兵のみで統率もロクにとれぬ連中。おそらくは陣形も考えぬでしょうな。我らは兵5000を槍兵2000、弓兵3000ほどに分け、そのうち兵1000ほどを分け、私が先兵として誘引に行き平地に誘い出すのです。」

「あとは槍兵を前にして敵兵を防ぎ、弓の雨を降らせて我らの勝利というわけです。騎兵による横撃で止めを。まあ、騎兵には別働隊として敵の陣地を破壊し、火を放つか奪うかをして貰わねばなりません。」

と俺が引き継ぐ。

「きちんとお分かりのようですね。陣形は衝輓こうやくの陣が良いでしょう。騎兵は関羽と張飛に任せてはどうかな？本陣は大將たる公孫？殿が指揮を執ればよろしい。」(2)

「勝手に決めんなー!!」

星の言葉に白露がうがーと叫ぶ。

「まあ、星の策が外れたことはないしな……。北郷と劉備は弓兵の右翼を任せることにするよ。皆、いいか？」

「は!!」

皆一様に頷く。

「戦か……。相手も元から盗賊になつたわけじゃないだろうけど、まあ、倒すしかないね。」

「ご主人様は戦が嫌なの？」

そう桃香がきいてくる。

「嫌というより、俺の居た世界では日々の生活が戦と隣り合わせと  
いうことは無かったからね……。人を殺めたことも無いし……。  
正直怖いかな。甄のお陰で自分には身の危険はないとわかっていて  
もね。それに、愛紗や鈴々のことも心配だし……。」

「ご主人様、我らの心配は無用です。」

「そうなのだ、お兄ちゃんのはのんびり構えてればそれでいいのだ。  
鈴々がガツーンと敵はやつつけるのだ。」

「まあ、お前たちが強いのはよく分かってるけど……。慢心だけ

はしないでくれよ。」

そして、開戦。

愛紗は敵本陣の掃除に向かい、鈴々は横撃。まさか横撃1発であっさり崩れるとは……。

わずか数時間で敵兵1万はほぼ壊滅。残った500人ほどの部隊は降伏を申し出てくる体たらく。

白露は「こんな連中なんてどうでもいい。」と言ったので、俺たちがいただきました。

こいつらの初仕事は穴掘り。”敵にも最低限の情けを”と言ってみんなを納得させました。まあ、俺たちの器の大きさを知って貰うのと伝染病とかが広がったり衛生環境が悪化するのを防ぐためなんだけど。

しかし……。

「大丈夫？ご主人様？顔が真っ青だけど。」

「何とかね。これから何度も戦はあるんだから、そう青くなつてばかりもいられないよ。でも……、ここまで死体が転がっているとやっぱりね……。」

両軍合わせて1万人を超える死体の山。荒野には大量の血が今もつ

いている。

味方の兵の遺体は一人一人埋葬。敵はさすがにまとめて埋葬だけど。

それをきちんと見届け、今回の戦は終結。やっぱり戦は可能な限り避けたいな、と改めて思う。

そして、俺たちは戦功として”義勇軍を募集する権利”を貰いました。俺が要求したんだけど。

兵士がいなきゃどうしようもないわけだし。

「しかし、ご主人様、敵の降伏をあっさり受け入れるのは行き過ぎでは？快く思わない兵も白露殿のほうには居るでしょうし、白露殿も我々もあまりいい気はしません。」

「それはそうだろうな、愛紗。でも、連中も望んで盗賊になったわけではないようであったことは見てわかったでしょ。」

墓を掘らせ、その後食事を与えただけで泣いて喜ぶ盗賊達。

さすがに、「元の邑に帰らせてくれ。俺は目が覚めた」という連中が居たけど、そいつらを帰すことまではしなかったけど。

「それはそのようですが……。」

「白露のところにいる兵も一歩間違えればあっちに居たとしても不

思議じゃないよ。基本的に金も食事もないから盗賊にならざるをえなかったわけで。」

そう、俺の世界のソマリアの人たちみたいに。可哀相な連中なんだよな。

「もし、反乱を起こした場合はどうするのですか？」

「その時は一人残らず捕らえて”車裂きの刑”にでもするしかないんじゃないかな……。二度と反旗を翻す気など起きぬよう。」

( 3 )

「……。わかりました。そういえば、なぜ白露殿は白馬に乗るのでしょうか？わざわざ大将の位置を教えることもないですし、非常に目立つと思うのですが……。」

「さあ？星も散々注意はしてるらしいんだが、それに関しては言うことを聞かないらしいよ。本人は”格好いいから”と言っていたけど。」

「……。」

「まあ、いざというときに影武者を白馬に乗せて自分は別の馬で逃げるように……。くらいしか弁護は思いつかないね。まあ、あの白露殿がそんなことをしているとは思えないけど。」

「お人好しですからね……。」

そしてその後も幽州北部を転戦。連戦連勝。まあ、関羽・張飛・趙



雲がいるんですからね……。

北平を中心として幽州北部は完全に制圧。公孫度も潰し、楽浪郡・  
・世界史でやったたっけなあ……つまり、朝鮮半島まで行ったこと  
になるのか。(4)

幽州の西部には劉虞とやらがいるらしい。善政は敷いてない様子。  
あんまり良い評判は聞かない。どんな奴だったかはあんまり覚えて  
ないな……。 (5)

ここまでわずか半年。圧倒的強さと言ってもいいような感じだ。北  
郷・劉備軍は兵数2000まで増強。

ずいぶん名声も高まったし、あとは趙雲引き抜いて流浪の旅かなあ。  
……。しかし軍師どうしようかなあ……。

勢力図を埋めて地図作るなんて俺一人じゃ無理だしね……。

## 解説

1 武田軍が本当に使っていたかは諸説ありますがね……。ま  
あ、いいんじゃないでしょうか？

2 要するに横長の長方形みたいな陣形。

3 秦(春秋戦国時代)の政治家、商鞅が編み出した刑法。四肢  
を馬に引かせ、バラバラにする恐ろしい死刑。作った本人もこの刑

法で死刑になる悲しい結末を辿る・・・。

4 公孫？の一族とは別物ですね。

5 光武帝の末裔らしいです。史実では人望厚い将だったとか。

## 第7話 初陣（後書き）

戦闘シーンは苦手かつ今作では二の次なのでどうしようかと思っていましたが、なら極力描かなければいいという結論に達しました。

ここまでやってしまっていたのでしょうか？わずか半年で。

次回は初のオリキャラと原作通りのキャラ・そして・・・が登場（予定）です。

真名考える時間を下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0302x/>

---

チートでチートな三国志・そして恋姫＋無双。

2011年10月30日02時14分発行